神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	『役者見立東海道』研究
著者	桑山童奈
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 31 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2005 年（平成 17 年）
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

【研究ノート】

『役者見立東海道』研究

桑山童奈

【要旨】
東海道を題材とする錦絵は初代歌川広重の『保永堂版五十三次』以降、数多く出版された。歌川豊国（三代）による『役者見立東海道五十三驛』は歌舞伎役者の似顔絵と東海道の沿道の風景を一図に組み合わせた揃物である。この揃物は現在までに宿駅の数をはるかに超える一三〇点以上が確認されている。このなかには宿駅以外の場所も多く含まれる。本稿では現在までに確認できたその作品群の情報を紹介し、その人気ゆえに総点数が増えたと想定できる出版過程について考察する。

【キーワード】東海道　浮世絵　出版　名所

はじめに

東海道の風景を題材とした浮世絵は数多く出版された。一宿を一枚に描く構図の揃物をはじめ、張交絵、三枚続、双六などさまざまな形式の錦絵に東海道の風景は取り上げられた。その一宿一図としたシリーズの多くは五三駅に始点の日本橋、終点の京を加えた五五点で構成される。しかし、なかには当時人気がでなかったのか、京までたどり着かず中断し、途中までしか作品が確認されないものもある。しかし、反対に宿駅ではない場所も取り上げて五五を超える点数となっている揃物もある。

点数の多い東海道の揃物に、文久三年（一八六三）に十六人の絵師によって描かれた一六〇点を超える『御上洛東海道』或いは、『合作東海道』とも呼ばれる『東海道名所風景』がある。そして、同様に点数の多い揃物に、本稿で取り上げる嘉永五年（一八五二）から翌年にかけて出版された三代歌川豊国『役者見立東海道五十三驛』（以下、本稿では『役者見立東海道』と呼ぶ。）がある。管見の限りではこの二つが際立って多くの地点を取り上げた東海道の揃物である。五五以上の点数から構成されたこれら二つの揃物には、宿駅以外の場所も取り上げられている。その場所の選択は、当時の東海道沿道の名所の受容から、それぞれの揃物のテーマである将軍の上洛や歌舞伎にふさわしいものを取り上げた結果であると考えられる。

本稿は『役者見立東海道』の作品を確認し、全体を概観することを目的とするものである。

一、『役者見立東海道五十三驛』

嘉永五年から翌年にかけて出版された三代歌川豊国（天明六年・一七八六～元治元年・一八六四）筆『役者見立東海道』は竪大判のシリーズで、現在筆者が確認した限り一三九点と目録が残されている。

このシリーズは歌舞伎役者の半身像を大きく描き、画面の中ほどを雲形で区切り、上部に背景として風景を描く。上部にある長方形の題箋には地名と役名が記され、その周縁はその役柄を示していると思われるものや植物などで飾られている。天保の改革後の時期らしく画面には役者の名前は記されないが、役者名の札を付したものも実見した。後述するが、この長方形の色や記された外題の言葉によって、この揃物はいくつかの種類に分類される。

役者の姿は白髪の頭部に空摺りが施されたり（「神奈川驛　渡守頓兵衛」図5ほか）、衣裳に正面摺（「戸塚驛　早野勘平」図10ほか）や布目摺が用いられるなど、摺も凝っている。彫摺に関して、彫師〝彫巳の〟が手がけた「白須賀　猫塚」の表現について「（略）あの猫婆の長い髪の毛が、ちゃんと毛筋が通り、本はこまかで末広がり、しかもフワリとして一本も乱れて居ない手際、あの百枚余りの続き絵の中、第一等の出来で、当時大に評判されたものだつた」と石井研堂著の『錦絵の彫と摺』[1]に紹介されている。[2]また、筆者が調査させていただいた国会図書館蔵のものなどは、どのような技法が施されたかはわからないが、うすい色の黒目の中で、瞳が黒々と盛り上がっているものがあった。なかには、白目の部分に膠を用いたのか光沢を見せるものさえ確認できた。このような趣向が凝らされた似顔絵は、当時の歌舞伎ファンにとって大いに魅力的なものであったことは想像に難くない。しかし、背景に描かれた風景は輪郭線が太く、後述するように初代歌川広重の『保永堂版五十三次』シリーズの図柄をあきらかに借用したことが指摘される作品も多くみられる。

このシリーズにはその一部である五五点の作品を取り上げた目録がある。それは『役者見立五十三驛』と題されており、各宿駅の名前、役柄、歌舞伎役者の名前が宿駅ごとに記される。役者の名前の前には「故人」あるいは「古人」と記されていることがあり、当時の人気役者だけではなく、既に亡くなっていたかつての人気役者をも取り上げたことがわかる。また、五五点の中には、八代目市川團十郎（文政六年・一八二三～嘉永七年・一八五四）ほか、何回も描かれている役者が複数いる。

二、『役者見立東海道』に関する言及とその点数

この作品は、出版された当時に大変人気があったとされる言説がいくつか見られることが、昭和五三年（一九七八）にリッカー美術館で行われた展覧会時に刊行された小冊子[3]に紹介されている。本稿でも以下に紹介したい。

斎藤月岑の『武江年表』の嘉永五年の項に「豊国が筆にて、天明の頃

より文化頃までの〈俳優似顔絵〉を梓行せしむ。[4]」とある。この年、三代豊国は『役者見立東海道』と同様に『木曽六十九驛』『俳優見立三十六花撰』ほか歌舞伎役者の大首絵を描くシリーズを残した。したがって、この言及は一連の作品群を指すものと考えられるが、もちろん『役者見立東海道』を含むことは間違いないであろう。

また、歌川派の浮世絵師たちに関する逸話を伝える飯島虚心による『浮世絵師歌川列伝』の「三世豊国伝」には「ここに於きて豊国、俳優似貌に見立たる東海道五十三次の錦絵を、かき出だせしが大に世に行わる。かの岡崎駅中村歌右衛門の見立政右衛門の如きは、来づ七千枚をすりたてたりとぞ。板本伊勢兼はこれを祝して、豊国および画工等を招き、盛なる祝筵を開きたり。此の如く売れたる錦絵は、古来未だ聞かざる所なり。よく売れたりとて大抵三四千枚に過ぎざるものなり（守川周重氏の話）。」と、その人気ぶりを伝えている。[5]

さらに高橋誠一郎氏は「彼れの〈五十三次役者大首〉の如きは版元の店先きに高張提燈を立て、賣出されたと記されてゐる。」とある。[6]この「五十三次役者大首」とは、『役者見立東海道』を示すと推測できるだろう。この年、もう一種、役者の似顔絵と東海道の組合せが出版されたが、中判の大きさであるため、この『役者見立東海道』ほどの印象を与えたと思わない。[7]高橋氏はこの逸話の出典を明らかにしてはいないが、やはり人気のほどを示す逸話が残っていた証といえるであろう。

一方で、このシリーズの全体像についての言及はあまり多くはない。また、それらに記される総点数は筆者により見解が異なり、このシリーズの全貌が未だ詳しく把握されて紹介されていないことがわかる。この揃物の点数について、新藤茂氏は現在一三九点確認されているという。[8]この見解が一番多い点数を指摘している。筆者も本稿をなすにあたって調査した結果、実見しえなかったものもあるが、目録ほか一三九点を数えることができた。ほか鈴木重三氏は初代歌川広重の保永堂版五十三次の影響を受けた作品としてこの『役者見立東海道』を取り上げ、現在一二九点確認されるとするが、「詳細未調査だが相当数になる。」とその数以上の作品が存在することを指摘する。[9]また前掲註三リッカー美術館『三代豊国による役者見立東海道五十三駅』には目録を含め、一二九点のリストを掲載している。長田幸徳氏が作成された三代豊国の作品目録『三代豊国作品目録錦絵編』[10]は版元別に作品が整理されているが一三七点が数えられている。以上が点数に関する見解であるが、新藤氏が指摘する最大と推定される点数を所蔵している機関は管見の限りでは見つからなかった。川崎・砂子の里資料館、[11]早稲田大学演劇博物館、東京都立中央図書館などが多数を所蔵している。

各所蔵機関に現存する作品を比較すると、ほぼ必ず含まれるもの、比較的含まれるもの、なかなか存在を確認できないものが浮かび上がってくる。それぞれの出版点数にばらつきがあることにより、総点数の把握が困難となっている可能性はないだろうか。

三、その成立

このシリーズは、前述のように間の宿を取り上げたものも含めて、目録に記された以上に多くの作品があるためか、既に成立時期等によりグループ分けをして考える試みがなされている。

前掲註三にあげたリッカー美術館の小冊子では、目録に記載のあるもの、外題が「東海道」に各宿駅間の地名と役名であるもの、外題が「東海道五十三次之内」に宿駅名あるいは各宿場の地名であるもの、という三つのグループに分けている。またグループごとに、版元別に改印の月によって出版順序を整理した表が作成されている。

新藤茂氏は前掲註七の『川崎・砂子の里資料館所蔵　浮世絵名品展』図録において、出版は大きく三段階に分けられると指摘されている。すなわち、第一期は最初に出た五五点、第二期は同じ宿駅で第一期と組物になるように背景の景色がつながるものが多いもの、第三期は間の宿シリーズとされている。

本稿において筆者の考えは基本的にリッカー美術館のものと同じであるが、第三のグループを二つに分けた分類を行ってみる。

この揃物の外題には三つの種類がある。一つは赤い長方形に「東海道五十三次之内」[12]と記し、宿駅の名前と役名が記されるもの、同様に「東海道五十三次之内」とし「○○駅○○駅の間　地名　役名」と記されるもの、そして、三色（紙の地の色を含む）の長方形に「東海道」と記し、「○○駅○○駅の間　地名、役名」の順番となるものである。

一はさらに目録に掲載されているもの（一－一）と、いないもの（一－二）に区別することができる。これらの改印、版元、彫師を以下の通り分類してみた。また、現在判明しているこの揃物の一覧が表一である。また、「六合渡シ」から「箱根　其二」までの現在の神奈川県域にあたる場所の作品を写真で紹介する。

グループ一－一　（55）
外題　東海道五十三次之内　宿駅名　目録に掲載されているもの
改印　子閏、子三、子四、子五、子六
版元　辻岡屋文助・住吉屋政五郎・伊勢屋兼吉・井筒屋庄吉
彫師　彫竹（彫工竹次郎）・彫巳の
摺師　大久

グループ一－二　（27）
外題　東海道五十三次之内　宿駅名　目録に掲載されていないもの
改印　子八　子九　子十　丑正
版元　辻岡屋文助・住吉屋政五郎・伊勢屋兼吉・井筒屋庄吉・蔦屋吉蔵
彫師　彫竹・彫巳の
摺師　大久

グループ二　（20）
外題　東海道五十三次之内　宿駅　宿駅　間

改印　子九　子十　子十一
版元　辻岡屋文助・住吉屋政五郎・井筒屋庄吉・蔦屋吉蔵・文正堂
彫師　彫竹・彫巳の・彫千之助・彫工上安
摺師　大久

グループ三（37）
外題　東海道　宿駅　宿駅　間
改印　子八　子九　子十　子十一　子十二　丑二
版元　高田屋竹蔵か?[13]・玉屋惣助・上総屋岩蔵（岩吉）・清水屋直次郎・住吉屋政五郎
彫師　彫多吉・彫千之助

このグループごとの性格を取り上げてみたい。目録に掲載されている作品群（グループ一－一）の出版が終了してから、それ以外のグループの出版が始まった、という見解はリッカー美術館、新藤氏ともに共通するものである。すなわちグループ一は嘉永五年（一八五二年）の閏二月から出版がはじまり六月に終了している。そしてグループ一－二、グループ三は八月の、グループ二は九月の改印が最も早いものである。グループ一－一は、五十三の宿駅に日本橋、京を加えたものであり、いうまでもなく、このグループだけで十分に東海道の揃物として成り立つのである。

版元、彫師の組み合わせについても指摘できることがある。版元については、グループ三だけがほかのグループと異なっている。グループ一－一、一－二、グループ二の版元は辻岡屋文助、住吉屋政五郎、井筒屋庄吉を中心にグループ一には伊勢屋兼吉、一－二はさらに蔦屋吉蔵、グループ二には蔦屋吉蔵と文正堂（小林泰次郎）が加わっている。しかし、グループ三の版元は住吉屋政五郎以外はほかのグループとは共通しない。またこのグループの彫師は多吉と千之助であり、千之助はグループ二にも名が見られるが、ほかのグループに共通する彫竹、彫巳のは手がけていない。

外題を記す題箋は、グループ三は基本的に三色であり、ほかのグループは赤一色である。[14]題箋の周囲に描かれた飾りは、グループ一と二では「小田原　飯沼勝五郎」（図23）の勝五郎の乗る台車や「川崎駅　白井権八」（図2）の梨のように、役柄や土地に関連するものが選ばれているように見える。一方、グループ三では基本的に単純な飾りであるように思われる。

したがって、グループ三はこの揃物のなかで、ほかのグループとは異質であるといえる。しかしながら、間の宿ばかりで宿駅そのものを取り上げてはいないため、このグループのみで一つの揃物とすることはできない。あくまでもほかのグループがあってこそ存在しうるものと思われる。

四、グループによる分類と出版過程

前述のように、グループ一－二とグループ二は基本的に改印の時期や版元は同じである。しかし、あえて区別したのは役柄の選択は基本的にこのグループ単位で行われているのではないか、と考えたからである。本稿で筆者は似顔絵の役者名および役名の出典の詳細な研究を行うことができなかった。しかし、現在わかっている範囲でその根拠を指摘してみたい。

最初に出版されたグループ一－一は複数の宿駅にまたがって一つの物語から登場人物が選択されることもある。グループ一－二はすべての宿駅について出版されてはいない。しかし、一つの宿駅で同じ物語の登場人物を取り上げたものは、例えば「箱根　初花」（図27）「箱根驛　其二　下部筆助」（図28）のようにグループ一－一のものと二枚並べると背景に描かれた滝がつながり、一枚ずつ見る以上に背景表現に効果を生む組み合わせとなるものもある。

グループ二は「土山　水口間　松ノ尾　松王丸」「水口　石部間　梅の木村　梅王」「石部　草津間　八重里　桜丸」と間の宿の連続で一つの演目（「菅原伝授手習鑑」）から取り上げる等、ほかのグループに分類される前後の場所よりもグループの中でのつながりが大きいことを示す組合せがある。

また、グループ二は「沼津　原間　井出の里」以降、「石薬師　庄野間　御殿山」まで見られない。一方、戸塚と藤澤の間、小田原と箱根の間では二種ずつ出版される。東海道の宿駅以外の場所で画題に取り上げやすい場所とは、その土地が人気ある歌舞伎の舞台となっているか、故事伝説が知られているか等に左右されているのであろう。

グループ三も、同様に特に他グループの前後の場所と強い関連を見せる役柄の選択は行われていないように見える。例外的に現在の神奈川県域から静岡県域にかけてはどのグループも「曽我物語」の登場人物を取り上げているが、これはあまりにも物語が人気があったからではないかと推測される。

このようなグループごとの特色から、この揃物がグループ一－一の人気に基づき、それぞれに似顔絵とする役柄および役者を選んで追加出版を行った様子が、よりわかりやすくなる。三代豊国が同じ嘉永五年に同じように役者の似顔絵を描いた『木曽六十九駅』は始点、終点に目録を加え七一点が確認され、さらに「遺存作品が極めて少ない」と指摘されていること[15]を考えると、東海道と役者の組み合わせは大成功した、といえるのではないだろうか。

五、おわりに

以上、三代豊国『役者見立東海道』について、その数と出版過程について調査を行った結果を記した。むろん、これから役者の同定や役柄の出典の詳細な調査を行うことで、前述のグループ分けなどは無意味なものとなる可能性もあるだろう。また、その研究の上で、土地にまつわる

故事伝説やそれに関わる歌舞伎をも取り上げた、他の東海道を題材とした揃物との比較などを行い、風景に加えられる視覚化された東海道にまつわるものごとについての考察を深めていきたい。

謝辞

本稿をなすにあたって作品の閲覧をご許可くださいました国立国会図書館、川崎・砂子の里資料館、また閲覧に加え、作品の写真を御提供いただきました東京都立中央図書館特別文庫室（以上敬称略）に御礼申し上げます。本稿は平成十四年度より始まった文部省科学研究費「浮世絵版画と名所に関する研究－東海道を中心に」（研究代表　嶋村元宏）の成果の一部である。

註

（1）石井研堂『錦絵の彫と摺』芸艸堂、一九九四年（昭和四年初版の昭和四〇年九月再版本の改訂復刻）、一一四頁。

（2）この逸話の存在については川崎・砂子の里資料館の斎藤文夫館長にご教示いただいた。

（3）『三代豊国による役者見立東海道五十三駅』平木浮世絵財団・リッカー美術館、一九七八年。

（4）斎藤月岑著金子光晴校訂『増訂武江年表2』平凡社、一九六八／九五年、一三二頁。

（5）飯島虚心著玉林晴朗校訂『浮世絵師歌川列伝』中央公論社、一九九三年（一九四一年畝傍書房刊本を底本とする。）、一三七頁。

（6）高橋誠一郎『浮世絵二百五十年』中央公論社、一九三八年、一七九頁。

（7）国立劇場調査養成部資料課編『国立劇場所蔵芝居版画等図録Ⅸ』日本芸術文化振興会、一九九六年、六四～九〇頁に中判シリーズの図版が掲載されている。

（8）馬頭町広重美術館編集・発行『川崎・砂子の里資料館所蔵　浮世絵名品展』二〇〇四年、八二～八三頁。

（9）鈴木重三「広重〈東海道絵〉の展開」鈴木重三、木村八重子、大久保純一『保永堂版　広重　東海道五拾三次』二〇〇四年、二〇七頁。

（10）長田幸徳『三代豊国作品目録　錦絵篇』二〇〇一年。

（11）『川崎・砂子の里資料館レポート』一九、二〇号、二〇〇三年。

（12）「十」は「拾」、「之」は「の」「乃」などの場合もある。

（13）この版元印について、前掲註一〇『川崎・砂子の里資料館レポート』一九、二〇号において高田屋竹蔵とされるが、鈴木重三氏により翻刻された「地本草紙問屋名前帳」『日本版画美術全集　別巻　日本版画便覧』（講談社、一九六二年、六五～七二頁。）の同版元印とはやや異なっているため、本稿では疑問符を付しておく。

（14）現在、グループ三に分類されるべきもので赤一色の題箋のものを確認している。「東海道　大津　京間　薮の下　清玄」と「東海道　吉田　御油間　いなむら孫右衛門」。などであるが「いなむら」の方は三色のものも確認できている。摺により題箋の色づかいが替わった可能性もあるが、本稿では版元を基準に分類してみた。

（15）鳥居秀男「三代豊国〈木曽六十九駅〉について」『浮世絵展　広重・三代豊国らの描く街道風景』編集・発行　平木浮世絵財団、一九九七

表1　『役者見立東海道五十三驛』一覧（未定稿）

分類	資　料　名	版　元	改　印	彫	摺	備　　考
	目録					
1-1	東海道五十三次の内　日本橋　松魚賣	辻岡屋文助	村松　福　子閏	彫竹	摺大久	故人坂東三津五郎
1-2	東海道五十三次之内　日本橋　水賣	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　日本橋　品川間　高輪　由良之助	高田屋竹蔵か？	村田　衣笠　子八			
2	東海道五十三次之内　日本橋　品川の間　高輪　大星力彌	井筒屋庄吉	濱　馬込　子九	彫巳の		
1-1	東海道五十三次の内　品川驛　幡随院長兵衛	辻岡屋文助	村松　福　子閏	彫竹	摺大久	古人松本幸四郎
3	東海道　品川　川嵜間　大森　おこ満	上総屋岩蔵	村田　衣笠　子八			
2	東海道五十三次之内　品川　川崎間　六合渡シ　平井権八	住吉屋政五郎	濱　馬込　子九	彫千之助		
1-1	東海道五十三次の内　川崎驛　白井権八	辻岡屋文助	村松　福　子閏	彫竹	摺大久	古人岩井杜若
3	東海道　川嵜　神奈川間　つるみ　丈八	上総屋岩蔵	濱　馬込　子九			
2	東海道五十三次の内　川崎　神奈川間　生麦村　由良兵庫	辻岡屋文助	濱　馬込　子九	彫巳の		
1-1	東海道五十三次の内　神奈川驛　渡守頓兵衛	辻岡屋文助	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	市川海老蔵
1-2	東海道五十三次之内　神奈川　おふね	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫巳の		
3	東海道　神奈川　程ヶ谷間　志んまち　雁金文七	高田屋竹蔵か？	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次の内　程ヶ谷驛　妙おかる	辻岡屋文助・伊勢屋？	米良　渡邉　子三	彫竹		坂東志うか
3	東海道　程ヶ谷　戸塚間　権太坂　いがみ	上総屋岩蔵	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次の内　戸塚驛　早野勘平	辻岡屋文助	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	市川団十郎
3	東海道　戸塚　藤沢間　大坂　逢坂	高田屋竹蔵か？	村田　衣笠　子八			
2	東海道五十三次之内　戸塚　藤澤間　吉田橋　松若	辻岡屋文助	濱　馬込　子九	彫巳の		
2	東海道五十三次之内　戸塚　藤澤間　鉄炮阪　三日月おせん	文正堂	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　藤澤　小栗判官	伊勢屋兼吉	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	坂東竹三郎
3	東海道　藤澤　平塚間　四ツ家　山帰リ	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次の内　平塚　萬長娘　おこま	伊勢屋兼吉	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	岩井粂三郎
1-2	東海道五十三次之内　平塚　有原屋業平	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　平塚　大礒間　化粧坂　鬼王	清水屋直次郎	村田　衣笠　子十二	彫多吉		
2	東海道五十三次之内　平塚　大礒間　曽我の里　少将	住吉屋政五郎	村松　福　子十	彫竹		
1-1	東海道五十三次之内　大礒　とら	井筒屋庄吉	村松　福　子六	彫巳の		古人岩井紫若
1-2	東海道五十三次之内　大礒　十郎祐成	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫巳の		
3	東海道　大礒　小田原間　梅澤　小吾郎兵衛	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次之内　小田原　飯沼勝五郎	住吉屋政五郎	村田　衣笠　子四	彫竹		森田勘弥
2	東海道五十三次ノ内　小田原　箱根間　曽我の里　鯰坊主	蔦屋吉蔵	村松　福　子十	彫竹	大久？	
2	東海道五十三次之内　小田原　箱根間　畑宿　工藤祐経	辻岡屋文助	濱　馬込　子九	彫巳の		
3	東海道　小田原　箱根間　西の川原　月小夜	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次の内　箱根　初花	伊勢屋兼吉	米良　渡邉　子三	彫竹		古人岩井半四郎
1-2	東海道五十三次ノ内　箱根驛　其二　下部筆助	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子九	彫竹		
3	東海道　箱根　三島間　山中　とち坊	清水屋直次郎	村田　衣笠　子十二	彫多吉		
2	東海道五十三次之内　箱根　三島間　山中　股野五郎	辻岡屋文助	米良　渡邉　子十一			
1-1	東海道五十三次の内　三島　おせん	伊勢屋兼吉	米良　渡邉　子三	彫巳の	摺大久	古人瀬川菊之丞　シタ売

分類	資　料　名	版　元	改　印	彫	摺	備　　考
1-2	東海道五十三次の内　三島　金谷金五郎	辻岡屋文助	村松　福　子十	彫巳の		
2	東海道五十三次之内　三嶋　沼津間　喜瀬川　(傾城)喜瀬川	井筒屋庄吉	米良　渡邉　子十一	彫巳の		
1-1	東海道五十三次の内　沼津　荷物平作	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		古人嵐猪三郎
3	東海道　沼津　原間　小諏訪　勝頼	清水屋直次郎	村田　衣笠　子十二	彫多吉		
2	東海道五十三次之内　沼津　原間　井出の里　河津三郎	住吉屋政五郎	米良　渡邉　子十一	彫千之助		シタ売
1-1	東海道五十三次の内　原　呉服屋重兵衛	辻岡屋文助	濱　馬込　子五	彫巳の		沢村長十郎
1-2	東海道五十三次之内　原の二　平作娘　およね	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫巳の		
3	東海道　原　吉原間　元よしはら　白酒賣	上総屋岩蔵	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次乃内　吉原　となせ	井筒屋庄吉	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	嵐璃寛
1-2	東海道五十三次之内　吉原　小那美	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　吉原　蒲原間　岩渕　女達磨	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五拾三次之内　蒲原　金江谷五郎	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫巳の		市川九蔵
1-1	東海道五十三次の内　由井　民部之助	辻岡屋文助	村松　福　子六	彫巳の		古人市川團蔵
1-2	東海道五十三次の内　由井　志のぶ	辻岡屋文助	村松　福　子十			
3	東海道　由井　興津間　さつた　井筒屋傳兵衛	上総屋岩蔵	米良　渡邉　子十一			シタ売
1-1	東海道五十三次之内　沖津　児雷也	伊勢屋兼吉	米良　渡邉　子三	彫竹		古人瀬川菊之丞
1-2	東海道五十三次之内　奥津ノニ　あやめ	住吉屋政五郎	村田　衣笠　子八			
3	東海道　奥津　江尻間　清見　白藤	上総屋岩蔵	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　江尻　弥次良兵衛	井筒屋庄吉	米良　渡邉　子三	彫竹		中山文五郎
3	東海道　江尻　府中間　中の郷　おしゅん	上総屋岩蔵	米良　渡邉　子十一			シタ売
1-1	東海道五十三次の内　府中　喜多八	住吉屋政五郎	米良　渡邉　子三	彫竹		市川廣五郎　シタ売
1-1	東海道五十三次之内　まり子　田吾平	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫竹	摺大久	片岡市蔵
1-1	東海道五十三次之内　岡部　六弥太	辻岡屋文助	村田　衣笠　子四	彫巳の		嵐吉三郎
1-2	東海道五十三次ノ内　岡部驛ノ上　忠度	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子九	彫竹		
1-1	東海道五十三次之内　藤枝　熊谷直實	辻岡屋文助	濱　馬込　子五	彫巳の		故人坂東三津五郎
1-2	東海道五十三次の内　藤枝　相模	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫竹		
1-2	東海道五十三次之内　藤枝　源義経	辻岡屋文助	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　島田　阿曽次郎	井筒屋庄吉	米良　渡邉　子三	彫竹		八代目市川團十郎
3	東海道　嶋田　金谷間　大井川　傳吉	清水屋直次郎	村田　衣笠	彫多吉		
1-1	東海道五十三次の内　金谷　朝顔	住吉屋政五郎	米良　渡邉　子三	彫竹	摺大久	坂東志うか
1-1	東海道五十三次之内　日阪　小早川帯刀	住吉屋政五郎　魚栄？	村田　衣笠　子四	彫竹		故人関三十郎
3	東海道　日坂　掛川間　本庄　権八	上総屋岩蔵	米良　渡邉　子十一			シタ売
1-1	東海道五拾三次ノ内　掛川　日本左衛門	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		古人松本錦升
1-1	東海道五十三次の内　袋井　忠信	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		嵐璃寛
1-1	東海道五十三次の内　見附　志づか	井筒屋庄吉	米良　渡邉　子三	彫巳の		坂東志うか　シタ売
1-1	東海道五十三次の内　濱松　毛剃九右衛門	辻岡屋文助	米良　渡邉　子三	彫巳の		市川海老蔵　シタ売
3	東海道　濱松　舞坂間　鳥居縄手　五右衛門	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次の内　舞坂　小町屋宗七	辻岡屋文助	濱　馬込　子五	彫巳の		古人市村竹之丞

分類	資　料　名	版　元	改　印	彫	摺	備　考
3	東海道　舞坂　荒井間　今切　冨樫之助	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次之内　荒井驛　小女郎	伊勢屋兼吉	村松　福　子六	彫竹		岩井粂三郎
3	東海道　荒井　白須賀間　はしもと　弁慶	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五十三次之内　白須賀　猫塚	住吉屋政五郎	渡邉　米良　子三	彫巳の		古人尾上菊五郎
1-2	東海道五十三次之内　白須賀　因幡之助	辻岡屋文助	村松　福　子十	彫巳の		
3	東海道　白須賀　二川間　山むら義経	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次之内　二川　石川友市	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		市川小團次
1-2	東海道五十三次之内　二川　小冬	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　二川　吉田間　いむれ　忠兵衛	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次之内　吉田之驛　夕霧	住吉屋政五郎	村松　福　子六	彫竹		尾上梅幸
1-2	東海道五十三次之内　吉田　ふじや伊左衛門	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　吉田　御油間　いなむら　孫右エ門	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次之内　御油　山本勘助	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫竹	摺大久	三枡大五郎
1-2	東海道五十三次之内　御油　其二　山本勘助母	蔦屋吉蔵	濱　馬込　丑正	彫竹	大久	
3	東海道　御油　赤坂間　縄手　梅川	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次の内　赤坂　澤井助平	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫竹	摺大久	古人坂東三津右衛門
1-2	東海道五十三次之内　赤阪　澤井又五郎	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫竹	大久	
1-1	東海道五十三次之の内　藤川驛　佐々木藤三郎	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子五	彫竹		尾上多見蔵
1-2	東海道五十三次ノ内　藤川驛　其二　三浦之助	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子九	彫竹		
3	東海道　藤川　岡崎間　生田　梶原源太	上総屋岩蔵	村松　福　子十			
3	東海道　藤川　岡崎間　源太同宿　梶原平次	上総屋岩蔵	米良　渡邉			
1-1	東海道五十三次の内　岡崎驛　政右衛門	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子五	彫竹		古人中村歌右衛門
1-2	東海道五十三次ノ内　岡崎驛　其二　政右衛門女房　お谷	伊勢屋兼吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
3	東海道　岡崎　池鯉鮒間　大濱村　千鳥	上総屋岩蔵	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次の内　池鯉鮒　業平	伊勢屋兼吉	渡邉　米良　子三	彫竹		坂東竹三郎
3	東海道　池鯉鮒　鳴海間　有松　伴左衛門	玉屋惣助	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次の内　鳴海　人丸	住吉屋政五郎	渡邉　米良　子三	彫巳の		尾上菊次郎　シタ売
3	東海道　鳴海　宮間　笠寺　おたつ	玉屋惣助	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　宮　景清	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫巳の		八代目市川團十郎
3	東海道　宮　桑名間　名古や　山三	玉屋惣助	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　桑名　徳蔵	住吉屋政五郎	渡邉　米良　子三	彫竹	摺大久	尾上菊五郎　シタ売
1-1	東海道五拾三次之内　四日市　鶯塚大八	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子四	彫巳の		大谷友右衛門
1-2	東海道五十三次之内　四日市　額の小さん	辻岡屋文助	村松　福　子十	彫巳の		
3	東海道　四日市　石薬師間　清水谷　清玄	清水屋直次郎	村松　福　子十			
1-1	東海道五十三次之内　石薬師　よし高	井筒屋庄吉	村田　衣笠　子四	彫竹	摺大久	沢村長十郎
1-2	東海道五十三次　石薬師　其二　大工与四郎	蔦屋吉蔵	濱　馬込　丑正	彫竹	大久	
2	東海道五十三次之内　石薬師　庄野間　御殿山　武智光秀	井筒屋庄吉	村松　福　子十	彫工上安		
3	東海道　石薬師　庄野間　高宮　櫻姫	清水屋直次郎	村田　衣笠　子十二	彫多吉		

分類	資　料　名	版　元	改　印	彫	摺	備　　考
1-1	東海道五十三次の内　庄野　中野藤兵衛	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫工竹次郎		坂東彦三郎
2	東海道五十三次之内　庄野　亀山間　森下　堀の蘭丸	文正堂	村松　福　子十	彫千之助		
1-1	東海道五十三次之内　亀山　藤川水右衛門	伊勢屋兼吉	村田　衣笠　子四	彫竹		古人松本幸四郎
1-2	東海道五十三次之内　亀山驛　其二　石井兵助	伊勢屋兼吉	村田　衣笠　子八	彫竹		
1-1	東海道五十三次の内　関　小まん	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		古人岩井紫若
1-2	東海道五十三次之内　關　伊達の与作	住吉屋政五郎	村田　衣笠　子八	彫竹		
2	東海道五十三次之内　關　坂の下間　筆捨山　狩野哥之介	住吉屋政五郎	村松　福　子十	彫千之助		
1-1	東海道五十三次の内　阪の下　次郎蔵	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫竹	摺大久	関三十郎
2	東海道五十三次之内　坂之下　土山間　鈴鹿峠　鬼神於松	井筒屋庄吉	村松　福　子十	彫巳の		
3	東海道　坂下　土山間　猪の鼻　勘平	玉屋惣助	村田　衣笠　子八			
1-1	東海道五拾三次之内　土山　阿漕平治	井筒屋庄吉	濱　馬込　子五	彫巳の		市川小團次
2	東海道五十三次之内　土山　水口間　松ノ尾　松王丸	井筒屋庄吉	濱　馬込　子九	彫巳の		
3	東海道　土山　水口間　おほの　定九郎	玉屋惣助	濱　馬込　子九			
1-1	東海道五十三次之内　水口　長右衛門	伊勢屋兼吉	渡邉　米良　子三	彫竹		沢村長十郎
2	東海道五十三次之内　水口　石部間　梅の木村　梅王	住吉屋政五郎	村松　福　子十	彫巳の		
1-1	東海道五十三次之内　石部　おはん	伊勢屋兼吉	渡邉　米良　子三	彫巳の	摺大久	岩井粂三郎　シタ売
1-2	東海道五十三次之内　石部ノ二　幸右衛門	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫竹		
2	東海道五十三次之内　石部　草津間　八重里　桜丸	辻岡屋文助	濱　馬込　子九	彫巳の		
1-1	東海道五十三次乃内　草津驛　鬼若丸	伊勢屋兼吉	濱　馬込　子五	彫竹		嵐吉三郎
2	東海道五十三次之内　草津　大津間　鳥井川　金棒引	井筒屋庄吉	濱　馬込　子九	彫千之助		
1-1	東海道五十三次之内　大津　又平	住吉屋政五郎	濱　馬込　子五	彫竹		故人中村梅玉
1-2	東海道五十三次之内　大津　又平女房　おとく	住吉屋政五郎	村田　衣笠　子八	彫竹		
2	東海道五十三次之内　大津　京間　大谷村　菅丞相	蔦屋吉蔵	村松　福　子十	彫竹	大久	
3	東海道 大津　京間　藪の下　清玄	上総屋岩蔵	村松　福　丑二			
1-1	東海道五拾三次之内　京　石川五右衛門	辻岡屋文助	福　村松　子六	彫巳の		故人中村歌右衛門
1-2	東海道五十三次の内　京　真柴久吉	辻岡屋文助	村田　衣笠　子八	彫竹		

註　役者名についてはまだ研究が不十分なため、備考欄に目録に記されている名前を記すのみとした。この表の作成にあたってはおもに以下の文献、HPを参考にした。なお、摺師については同じ作品でも、ものによって名前の記載があるものと、ないものとがあることが確認できているため、一点でも確認できればその名を記した。

文献　『三代豊国による役者見立東海道五十三駅』平木浮世絵財団・リッカー美術館、一九七八年。長田幸徳『三代豊国作品目録　錦絵篇』二〇〇一年。『東海道広重美術館　館蔵品　総合図録』東海道広重美術館、二〇〇二年。『砂子の里資料館レポート』一九、二〇号、二〇〇三年。『浮世絵展　広重・三代豊国らの描く街道風景』草津宿街道交流館、二〇〇四年。

HP　国立国会図書館（http://www.ndl.go.jp/）　東京都立中央図書館（http://www.library.metro.tokyo.jp/12/）

図２　東海道五十三次の内　川崎驛　白井権八
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

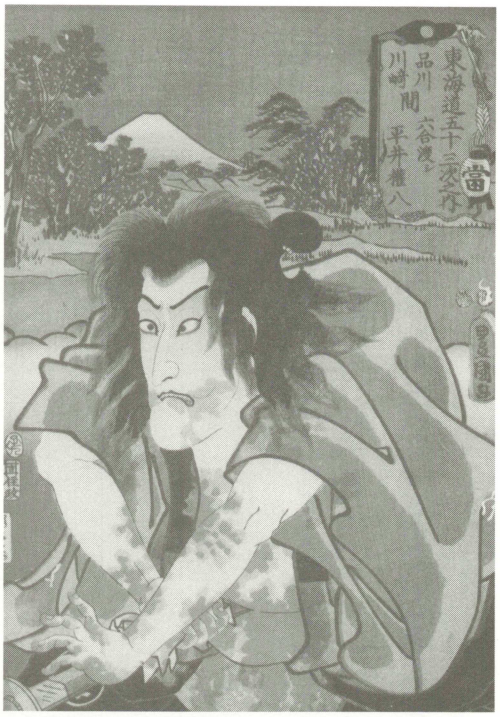

図１　東海道五十三次之内　品川　川崎間　六合渡シ　平井権八
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

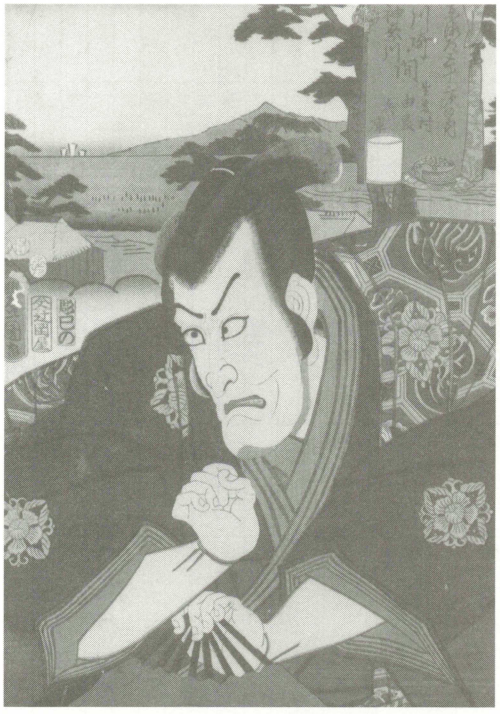

図４　東海道五十三次の内 川崎 神奈川間 生麦村 由良兵庫
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

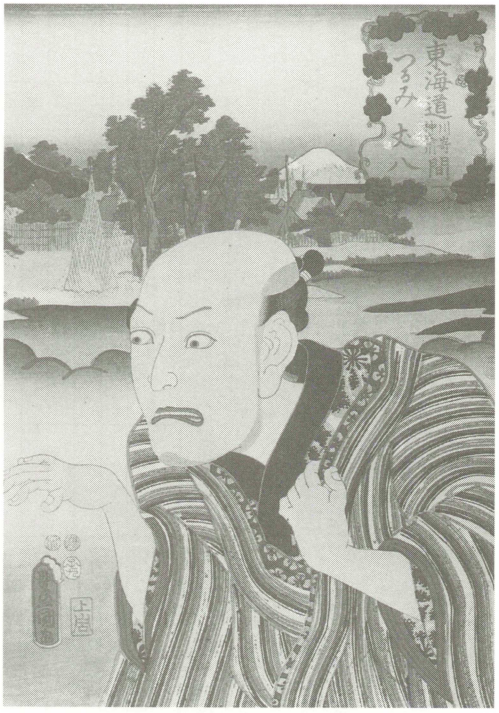

図３　東海道　川嵜　神奈川間　つるみ　丈八
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

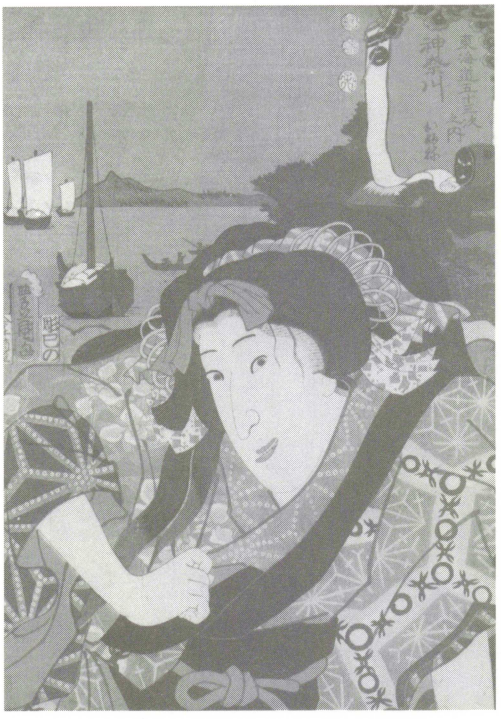

図６　東海道五十三次之内　神奈川　おふね
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

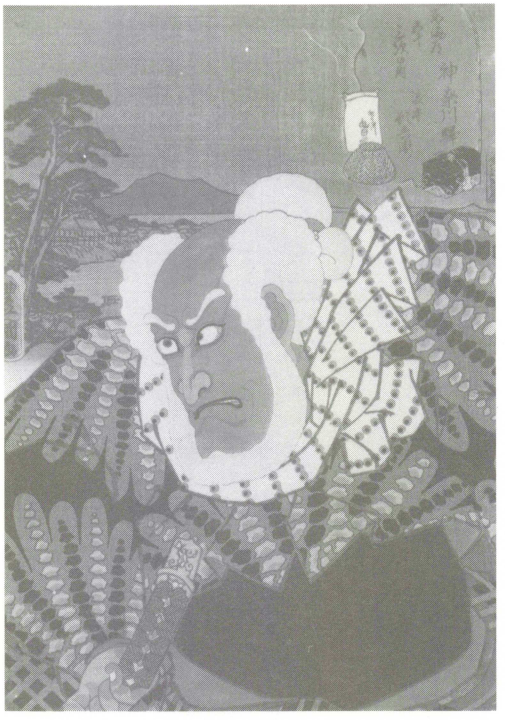

図５　東海道五十三次の内　神奈川驛　渡守頓兵衛
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図８　東海道五十三次の内　程ヶ谷驛　妙おかる
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図７　東海道　神奈川　程ヶ谷間　志んまち　雁金文七
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

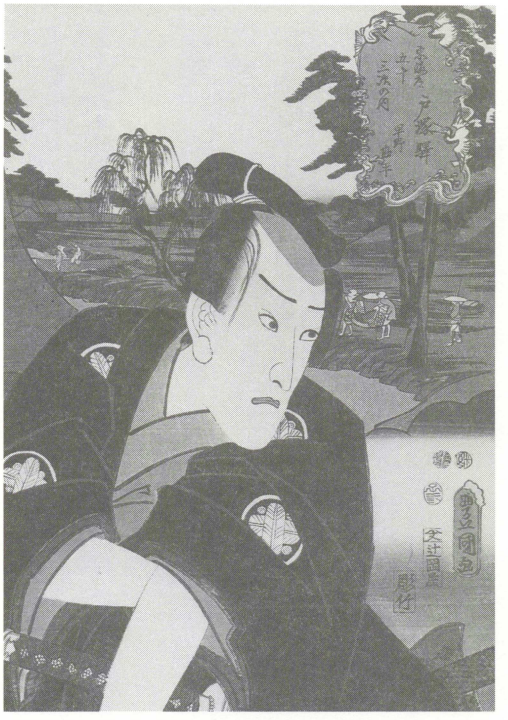

図 10 東海道五十三次の内　戸塚驛　早野勘平
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 9　東海道　程ヶ谷　戸塚間　権太坂　いがみ
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 12 東海道五十三次之内　戸塚　藤澤間　吉田橋　松若
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

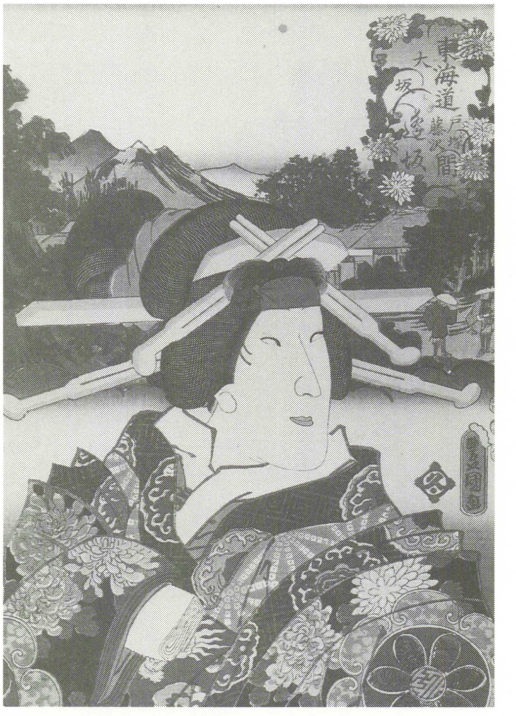

図 11 東海道　戸塚　藤沢間　大坂　逢坂
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 14 東海道五十三次之内　藤澤　小栗判官
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 13 東海道五十三次之内 戸塚 藤澤間 鉄炮阪 三日月おせん
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 16 東海道五十三次の内　平塚　萬長娘　おこま
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 15 東海道　藤澤　平塚間　四ツ家　山帰リ
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

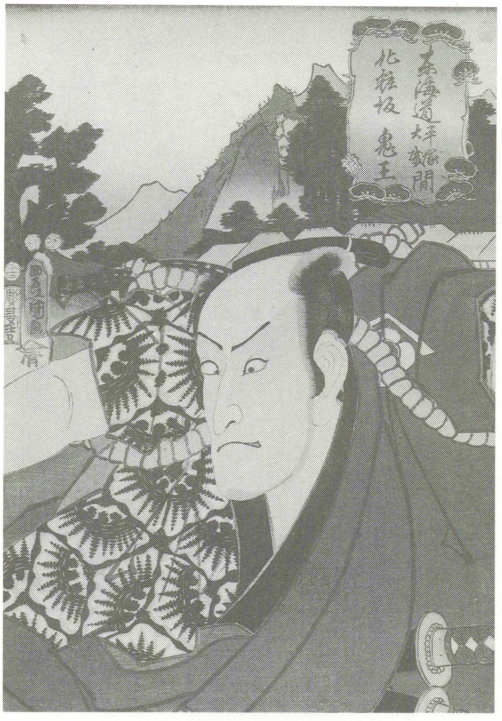

図 18 東海道　平塚　大礒間　化粧坂　鬼王
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 17 東海道五十三次ノ内　平塚　有原屋業平
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 20 東海道五十三次之内　大礒　とら
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 19 東海道五十三次之内　平塚　大礒間　曽我の里　少将
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 22 東海道　大礒　小田原間　梅澤　小吾郎兵衛
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 21 東海道五十三次之内　大礒　十郎祐成
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 24 東海道五十三次ノ内 小田原 箱根間 曽我の里 鯰坊主
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 23 東海道五十三次之内　小田原　飯沼勝五郎
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 26 東海道　小田原　箱根間　西の川原　月小夜
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 25 東海道五十三次之内 小田原 箱根間 畑宿 工藤祐経
東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

図 28 東海道五十三次ノ内　箱根駅　其二　下部筆助
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション

図 27 東海道五十三次の内　箱根　初花
神奈川県立歴史博物館　丹波コレクション